

晴れ時折薄曇り。連休を控えた31日（金）、モーターショーもいよいよ後半の追い込みを迎えた。メインゲートには平日にもかかわらず朝から若者たちをはじめ大勢の人が押し寄せ、活気づいていた。各ブースでも多彩なパフォーマンスを展開、集客に熱を入れてきた感じ。また、BAYFM（ベイエフエム）が西休憩ゾーンのフェスティバルパークを中心に展開されている交通安全関連のイベントを紹介していた。これは日本自動車工業会の提供による6時間の交通安全特番の中で行われたもの。

小さなクルマで 大きな未来を提案



コンパクトSUVの「LANDBREEZE」(左)と都市型コミューターの「S-RIDE」



コンパクトながら4人が乗れるオープンカーの「CONCEPT-S2」



「可愛い夢のあるクルマがたくさんあって楽しいね」——。西ホール奥にあるスズキのブースを訪れた若いカップルの女性がこんな感想をもらしていた。今回のテーマは昨年の商用車ショーに引き続いて「小さなクルマ、大きな未来」。スモールカーだからこそ実現できる楽しさと満足感を限りなく追求したユニークなコンセプトカーが勢ぞろいしている。

新型「ワゴンR」などの市販車の展示エリアは軽自動車と小型車に分けられているほか、コンセプトカーもサイズによってステージごとに振り分けられている。ホワイトボードのフロアは清潔感が漂い、すっきりしているどの角度から見やすいブースだ。

壁面コーナーには4つのステージを設けてコンセプトカーを展示。その中央には鮮やかなイエローのオープンカーの「CONCEPT(コンセプト)-S2」がひととき目を引く。2002年のパリモーターショーでデビューし、注目を浴びた「CONCEPT-S」のオープンバージョンだ。1.6リットルDOHCエンジン、6段変速機を装備する4人乗りの本格スポーツカーで、新開発の「3分割回転電動格納式オープントップ」を採用している。これは2分割したルーフの前部、後部とバックウィンドーの3つのパーツが、電動で回転しながらリヤのトランクスペースに収納されるシステム。コンパクトながら4人が乗れる居住空間で、走りの楽しさを追求している。

コンパクトサイズの燃料電池車も披露

中央通路側のステージには可愛らしい「S-RIDE」(エスライド)と「LANDBREEZE」(ランドブリーズ)の2台を展示。「S-RIDE」は二輪の楽しさと四輪の実用性を兼ね備えた都市型コミューターだ。軽自動車サイズで前後2人乗りというパッケージで都市におけるモータリゼーションを提案している。「LANDBREEZE」はコンパクトSUVで、自然循環素材やリサイクル性に優れたアルミ材、石油外資源100%のタイヤを装着しているのが特徴。この



燃料電池車の将来像をイメージした「モバイルテラス」



ほか、軽自動車の「ツイン」をベースに製作した女性向けのおしゃれな一人乗り乗用車「ツイン マイスタイル」や、全長4mというコンパクトサイズで3列シートを実現し、燃料電池車の将来像をイメージした「モバイルテラス」などに人気が集まっている。また、提携先のGMと共同開発した軽自動車サイズの燃料電池車も展示。燃料電池ユニットの小型化をアピールしている。



軽自動車サイズの燃料電池車「MRワゴン FCV」

TOPICS

子供たちの歓声がひびく「こども広場」

— キッズコーナー —

北ホール2階に設けたこども広場。ソフトマットを敷き詰めた子供専用の遊び場が置かれており、よちよち歩きの子供から小学校低学年の子供までモーターショーそっちのけで遊びまわる。大声を上げたり、走り回ったり、広い空間で開放感を満喫。まさにここは「こども天国」。

幼児くるま絵画展

「こざくらようちえんで〜す」

北ホール2階のトミーに隣接して展示されているのがクレヨンで描かれた絵。千葉市内57の幼稚園児たちの作品で、総数は3625点。「くるまでおでかけ!〜くるまで出かけた楽しい思い出〜」などがテーマ。親子で見に来たり、園児が団体で入れ替わり立ち代わり訪れる。来場した園児に園名を聞くと一斉に「こざくらようちえんで〜す」と元気がいい。「くるまを見ることができると、みんな喜んでいました」と引率の藤崎先生。こどもモーターショーの風物として定着してきた。



乳児・幼児サービスセンター

キッズコーナーの中心施設。3歳から6歳までの未就学児童を預かる託児施設と授乳室、おむつ交換、それにベビーベッドが置かれており、子供連れの若いママ・パパでいっぱい。託児施設は申し込み制で、1人2時間まで預けることが可能。週末になると100人を超える利用者が詰め掛け、保育士さんも大忙し。その他の施設は自由に利用でき、もちろん無料。

「最近はサービスセンターの存在を知っている人が増えてきました」と保育士さん。「ここを上手に利用されていますよ」。



ブランドの個性を前面に環境技術などもアピール 外国車展示ブース



革新的技術搭載のモデルが先進のデザインで集結 ゼネラルモーターズ

世界のビッグワン、ゼネラルモーターズ（GM）は、キャデラック、シボレー、オペル、サブ、ハマーの5つのブランドをブース内に配した。それぞれのブランドの個性を強調しながらGMグループの広がりを紹介するとともに、ブース中央にGMタイムゾーンを設けて、コンセプトカー「ハイ・ワイヤ」や燃料電池自動車「ハイドロジェン・スリー」を展示、GMの考える環境技術や未来の自動車の姿を提示している。

燃料電池技術や運転操作を電子制御で行うハイワイヤ技術を採用した「ハイ・ワイヤ」は、スケートボード状のシャシーに燃料電池と駆動系を格納、広い居住空間を確保しながらいろいろなボディ形状が採用できるという未来の自動車である。

ブランド別展示では、見る者を圧倒するのがキャデラックの「シックスティーン」。その名のとおり、13.6リッターのV型16気筒エンジンを搭載、1000馬力を発生するが、走行状況に応じて4、8、16気筒に切り替わる可変シリンダーシステムを採用している。また、キャデラックのコーナーには、ダイナミックなデザインのオープンカー「XLR」、斬新なデザインのSUV「SRX」などの市販モデルも人気を集めている。

シボレーのコーナーには、ジウジアエロとイタルデザインチームによる「エピカ」、ピニンファリーナデザインの「オプトラ」など日本市場投入を予定しているセダンを参考出品、ハマーのコーナーではオフローダー「ハマーH2」が来場者の前にせり出すように展示され、迫力を誇示している。



燃料電池技術とハイワイヤ技術を盛り込んだ「ハイ・ワイヤ」



ボンネットトップがガルウィング状に開く「シックスティーン」



ドイツ車の味わい深い走りとは斬新なデザインを提供 オペル

GMブルーのブース装飾を背景に鮮やかな黄色のイメージカラーが引き立つオペルコーナーの正面で、「インシグニア」が強烈な印象を与えている。コーナー内の新型「アストラ」や市販モデルを従えるコンセプトカーだ。単なるラグジュアリーセダンというだけでなく、V8・344馬力エンジンは最高速度250km/hを引き出すなどドライビング・ダイナミクスを実現、また、独自開発のパンタグラフ機能を内蔵するリアシートやリアゲートを採用することで多様性を広げ、さらにダイナミックなデザインとプロポーションによる表情豊かなスタイリングを採用するなど、オペル・ブランドが中核的な特徴としているポイントを具現化した。

オペルコーナーのもう1台は、3代目の新型「アストラ」。伝統のハッチバックスタイルに回帰しながら、オペルの顔になった「V字型グリル」を採用、インタラクティブ・ドライビング・システムを搭載し一気にスポーツ性を高めた。



ラグジュアリーセダンを新機軸を盛り込んだ「インシグニア」



各グレードにフラッグシップモデルを展示 サブ

北欧のモダンをコンセプトとした落ち着いた雰囲気の中に展示されたサブ車3台は、コンセプトカー「9-3 スポーツハッチ・コンセプト」と「9-3 カブリオレ エアロ」「9-5 エステート エアロ」。サブ伝統の5ドアデザインを継承した「9-3 スポーツハッチ・コンセプト」は、ミッドサイズワゴン市場に参入する意思を初めて示した意欲的なモデル。アクティブな走りをもたらす最高出力250馬力の2.0リッター・ターボチャージャー付きで、サブ独自技術のコーナー進入時に回頭性を高めるリアクシス・ステアリング機構を装備したマルチリンク式サスペンションを搭載している。



多様性にも配慮した「9-3 スポーツハッチ・コンセプト」

エコと快適性を高次元で拓く 42Vパワーネット

(10月30日開催)



◆基調講演

ジョン・G・カサキアン氏 (マサチューセッツ工科大学教授)

◆講師

立花 武氏 (トヨタ自動車技術統括部)

池田 貞文氏

(日産自動車電子技術本部電子電装開発部電源設計グループ)

近田 隆愛氏 (スタンレー電気研究開発センター)

小松 康幸氏 (本田技術研究所栃木研究所D7開発ブロック)

阿部 邦宏氏 (富士重工業スバル技術本部)

増野 敬一氏 (日立製作所オートモティブシステムグループ)

白木 和幸氏 (オートネットワーク技術研究所)

神保 裕行氏 (松下電池工業商品技術グループ)

バララマ・V・マーティ氏 (GM)

ノーマン・トラム氏 (SAEインターナショナル)

ピーター・ミラー氏 (リカルドPLC)

◆総合司会

寺谷達夫氏

(トヨタ自動車技術統括部)

42V導入で熱い討議

世界の“42V”スペシャリストが集い、日米欧それぞれが導入と計画を討議した。トヨタはクラウン、日産はe-4WDという42Vの量産車種を使って解説、またGMからは導入の計画が発表された。同時にわが国の42Vに関するシステム及び要素技術の開発についても多くの発表が行われた。車の電動化、高電圧化が進む中で42Vの導入が確実に進むことが確認された。



立花 武氏

アジア各国の環境問題とその取り組み

(10月30日開催)



◆講師

小尾 敏夫氏 (早稲田大学大学院国際情報通信研究科教授)

原 剛氏 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)

ツー・タン氏 (中国/南開大学環境学部教授)

チャチャイ・ラタナチャイ氏

(タイ/プリンス・オブ・ソングクラ大学環境経営学部学部長)

アントニオ・アルカンタラ氏 (フィリピン大学環境経営学部学部長)

ムハマド・アワン氏 (ボトラマレーシア大学副学長)

シンポジウムは基調講演で、小尾氏が「環境保全はアジアに共通する課題」とした上で、自工会や部工会による自動車専門家派遣事業などの協力事業も紹介。また、原氏は、環境問題に関する欧米基準などへの対応を通じて「日本の環境問題への取り組みレベルが向上した」と述べた。

各国の状況説明では、タイでは「政府機関より民間機関の活動が

活発なこと」、マレーシアでは「法制度の整備による取り組みが進みつつあること」、フィリピンでは「環境問題から派生する問題への取り組みがテーマになっていること」、中国では「排ガス規制の国際標準化導入など強化の方向にあること」などが紹介された。

パネルディスカッションに移り、「モータリゼーションの恩恵の偏りの是正」(タイ)、「環境問題は世界の課題」(中国)、「渋滞問題などの解決には日本からの教育・指導が必要」(マレーシア)などの意見を集約し、原氏が公共交通機関の活用や環境に優しい商品に対するインセンティブ効果、都市の分散化などを指摘。最後に小尾氏が「環境問題に国境はないので、日本とアジア諸国の対話を通じた取り組みが必要」と述べ締めくくった。



小尾 敏夫氏

TOPICS

当社も「Challenge & Change」です
トミー



北ホール2階のキッズコーナーにトミーが出展、今回も長い行列ができています。販売しているトミカは「第37回東京モーターショー開催記念」と銘打ったダイハツ・コペンなど9車種だ。訪れた人は購入表を手に品定め之余念がない。今回はICチップを組み込んだメロディを奏でるトミカなどを展示、当社も「Challenge & Change」です。

今日のイベント(予定)

★ 白バイデモ

11:00~11:30 1回目デモ

13:00~13:30 2回目デモ

フェスティバルパーク(西休憩ゾーン)

★ シンポジウム

13:30~15:00 バイクの世界 その魅力と夢
(国際会議場2F・国際会議室)

14:00~15:30 みんなで考えよう クルマの税金2003
(国際会議場2F・201号室)

★ トラフィック戦隊アンゼンジャーショー

11:00~11:30

13:00~13:30

16:00~16:30

フェスティバルパーク(西休憩ゾーン)

★ クリーンエネルギー車同乗試乗会

10:30~16:30 環境体験ランド(幕張海浜公園)

10月31日の入場者数 **92,500**人

入場者数合計 **739,500**人

よその会社でのドキュメント活用、
ちょっと気になりませんか？

▼ オンデマンド印刷を活用した豊富な事例もご覧いただけます。詳しくは…

DocuPlaza (ドキュプラザ) <http://www.docu-plaza.com/>

Color DocuTech 60

機材協力：富士ゼロックス株式会社

用紙協力：富士ゼロックスオフィスサプライ株式会社

このニュースは「Color DocuTech 60」で、
再生コート紙「eCOAT105」に出力しています。

eCOAT105
THE DOCUMENT COMPANY
FUJI XEROX